

和尚さんと小僧

動画リンク : <https://youtu.be/XwVmJT-Sgec>

日本昔ばなし 和尚さんと小僧

今回は日本の昔ばなし、「和尚さんと小僧」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

■はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「和尚さんと小僧」は師匠と弟子の関係をえがいた話で、日本の有名な昔ばなしの一つです。

それでは「和尚さんと小僧」のお話を始めます。

すぐくけちんぼな和尚さんがいました。

何かよそからもらっても、いつでも自分一人ではばかり食べて、小僧には一つもくれませんでした。小僧はそれをくやしがって、いつか、すきを見つけて、和尚さんからおいしいものを取って食べてやろうと考えていました。

ある日、和尚さんは、すごくおいしいあめをもらいました。

和尚さんはそのあめをつぼの中に入れて、そっと仏壇の下にかくして、ないしょでひとりでなめていました。

ところがある日、和尚さんは、用事があって外へ出て行きました。

出て行きがけに、和尚さんは小僧に言いました。

「この仏壇の下のつぼには、だいじなものが入っている。見かけはあめのようなけれど、ほんとうは、一口でもなめたら、ころりとまいてしまうひどい毒薬だ。命が惜しいと思ったら、けっしてなめてはならないぞ。」

と言って、出て行きました。

和尚さんが出てしまうと、小僧はさっそくつぼを引きずり出して、残らずあめをなめてしまいました。

それから、和尚さんの大切にしている茶わんを、わざと真っ二つに割って、自分は布団をかぶって、うんうんうなりながら、死にかけているようなふりをしていました。

夕方になって、和尚さんが帰って来てみますと、中は真っ暗で、明りもついていませんでした。

和尚さんはおこって、

「こらこら、小僧、何をしている。」

と、どなりました。

すると小僧は布団の中から虫の鳴くような声を出して、

「和尚さん、ごめんなさい。わたしはもうとても助かりません。他界したあとは、かわいそうだと思って、お経の一つも読んで下さい。」

といいました。

和尚さんは、いきなり妙なことをいわれて、びっくりしました。

「小僧、小僧、いったいどうしたのだ。」

「きょう、和尚さんのだいじなお湯飲みを洗っていますと、いきなり猫がじゃれかかって来て、そのひょうしに手をすべらせて、お湯飲みを落としてこわしてしまいました。もうこれは自分のせいで申し訳ないと思って、つぼの中の毒薬を出して、残らず食べました。もう、毒が体中に回ってしまうでしょう。どうかゆるしてやって、お経だけ読んで下さいああ、苦しい、ああ、苦しい。」

ある日、和尚さんは、ご法事に呼ばれて行って、小僧が一人でお留守番をしていました。

お経を読みながら、うとうと居眠りをしていますと、玄関で、

「ごめんください。」

と人の呼ぶ声がしました。

小僧があわてて、目をこすりこすり行ってみますと、お隣のおばあさんが、大きなふろしき包みを持って来て、

「おひがんでございますから、どうぞこれを和尚さんに上げて下さい。」

と、いって、置いて行きました。

小僧はふろしき包みを持ち上げてみますと、中から温かそうな湯気が立って、ぷんとおいしそうな匂いがしました。

小僧は、

「ははあ、おひがんでお団子をこしらえて持って来たのだな。これを和尚さんにこのまま渡してしまえば、どうせけちんぼで欲ばりの和尚さんのことだからみんな自分で食べてしまって、一つもくれないにきまっている。よしよし、ちょうどいい、ねむけざましに食べてやれ。」

と、こう独り言をいいながら、ふろしき包みをほどくと、

大きなお重箱にいっぱい、おいしそうなお団子がつまっていました。

小僧はにこにこしながら、お団子をほおぼって、もう一つ、もう一つと食べるうちに、とうとうお重箱にいっぱいのお団子を、きれいに食べてしまいました。

食べてしまって、小僧ははじめて気がついたように、
「ああ、しまった。和尚さんが帰って来たらどうしよう。」
と、困ってべそをかきました。

そして、ふと何か思いついたとみえて、いきなりお重箱をかかえて、本堂へ駆け出して行きました。
そして御本尊の金仏さまのお口のまわりに、重箱のふちにたまったあんこを、指でかきよせては、こてこてとぬりつけました。
そして重箱を金仏さまの前に置いて、部屋に帰って来て、知らん顔をしてお経を読んでいました。

しばらくすると、和尚さんは帰って来て、小僧に、

「留守にだれも来なかったか。」
とたずねました。

「お隣のおばあさんが、お重箱を持ってきました。おひがんだから和尚さんに上げて下さいといいました。」
と、小僧は答えました。

「その重箱はどこにある？」

「本堂の御本尊さまの前に上げて置きました。」

「うん、それはなかなか気が利いている。どれ、どれ。」
といいながら、和尚さんは本堂へ行ってみますと、なるほど重箱がうやうやしく、御本尊の前に上がっていましたが、あけてみると、中はきれいにからになっていました。

「これこれ、小僧。きさまが食べたのだな。」
と、和尚さんは大きな声でどなりつけました。

すると小僧はすまして、のこのこやって来て、

「へええ、とんでもない、そんなことがあるものですか。」
といいながら、そこらをきよろきよろ見まわして、

「ああ、わかりました。御本尊の金仏さまが食べたのです。ほら、あのとおりにお口のはしに、あんこがいっぱいついてます。」
と、こういって、和尚さんはそれを見て、

「なるほど、あんこがついている。お行儀のわるい金仏さまもあつたものだ。」
といいながら、おこって手に持っていた扇で、金仏さまの頭を一つくわせました。
すると「くわん、くわん。」と金仏さまは鳴りました。

「なに、くわんことがあるものか。」
と、またおこって二度つづげまにたたきますと、また「くわん、くわん。」と鳴りました。

そこで和尚さんは、また小僧の方を振り返ってみて、
「それ見ろ、金仏さまはいくらたたいても、くわん、くわんというぞ。やはりきさまが食べたにちがいない。」

すると小僧は困った顔をして、
「たたいたぐらいでは白状しませんよ。釜茹でにしておやんなさい。」
といました。

そこで大きなお釜にいっぱいお湯を沸かして、金仏さまをほうり込みました。
すると間もなく、お湯がぐらぐらにたぎってきて、「くった、くった、くった。」
といました。

「そら、ごらんなさい、和尚さん。とうとう白状しましたよ。」
と、小僧さんは得意げにいました。

日本昔ばなし「和尚さんと小僧」は、いかがでしたか

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

